

原発のない 世界を求め 国際協議会



あの東日本大震災からちょうど3000日目になる5月28日から31日まで、仙台基督教教会と茂庭荘を会場に「原発のない世界を求める国際協議会」が開催され、11

教区の信徒・聖職・主教と英国、米国、韓国、台湾、フィリピン各聖公会からの参加者、日本キリスト協議会平和・核問題委員会、管区正義と平和委員会、管区事務所各主事、実行委員・スチュワードを含めて68名が参加されました。神戸教区からは小林主教、瀬山会治司祭と私が参加させていただきました。

ドイツから招かれたミランダ・シェラーズ氏による基調講演「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」では、ドイツが脱原発を進める背景には核拡散に対する恐怖、平和が脅かされることへの懸念があり、そのため再生可能エネルギーへの転換が進められているということをお聞きしました。そして第2講演では、日本基督教団牧師で「東北ヘルプ」という被災支援活動を続けておられる川上直哉氏が「十字架ヲ通ツテ光ヘキ苦難の中からの声・惨禍の中の祈り」と題し、日頃の活動から見た被災地の現状を話されました。さらに台湾から頼主教、韓国から金司祭、日本から相澤司祭がそれぞれ発題され、それを受けて2回にわたるグループシェアリングを行ない、その後全体会で活発な話し合い、意見交換の時を持ち、声明を採択しました。

広島・長崎と原爆の恐ろしさはよくわかってはいるつもりでも、核の平和的利用と云われていた原発と原爆がコインの裏表であるとの認識が不足していたこと、原発は事故がひとたび起こった時に、その影響が自国だけでなく世界的規模になること、次世代にまでも影響する放射性廃棄物の問題、福島でも2000人を超える子どもたちに甲状腺がんが見つかっていること等、この3日間で知った重要な情報が私たちにいかに知らされていかなかったと恐ろしくなりました。一刻も早く原発のない社会を目指していかねければならないと思っています。

仙台の街は、櫻の緑がとももきれいに輝いていて、「全ての命を大切にしたい」との思いが強くなりました。

難波美智子・
神戸昇天教会信徒

教役者修養会 in 高知

6月25日から27日の3日間、高知に於いて教役者修養会が開催されました。日ごろ会うことが多くない教役者同士が、2泊3日を共に過ごし、講演を聴き、研修を行い、そしてリフレッシュをして現場へ戻る貴重な時間となりました。

1日目に行なわれた講演会では、高知聖パウロ教会の信徒であり、精神科医の弘井医師から日常業務の中で出会ってきた多くの方々のケースを、私たち教役者が出会う可能性があることも含めて臨床

現場からの貴重でリアルな話をお伺いしました。

2日目には、ハラスメント講習会が行われました。教役者の立場は、意識・無意識にかかわらず、言葉や態度で人を傷つけることがあること、今まで「大丈夫だ」と考えられていた言動や行動が、様々なハラスメントとして認知されていること、所謂「いじり」や「笑う」という行為もその範疇に含まれること、傷つけられた側はいつまでもそのことによつて苦しめられていることなど、「多少のことなら大丈夫」という考え方も改める必要があることなど、京都教区で配布されているハラスメント防止リーフレットを参考に、教役者同士においても、また教役者と信徒ほか人間関係すべてにおいて、これからの教役者の在り方を改めて確認する研修を行いました。その他、日本聖公会において堅信前陪餐が認められ、その堅信前陪餐の準備について各教役者間での意見の共有を行いました。また信徒奉事者の礼拝奉仕について、今後教役者の減少が進み、信徒奉事者の礼拝奉仕の役割が重要になってくるのではないかと、現状の教会における信徒の奉仕者

と礼拝奉仕者としての信徒奉事者の違いや、どのように礼拝に参加していくのか、今後実際にどのような立場で信徒奉事者というものを捉えていくのか話し合われました。これらの重要な事柄について、丁寧な時間を取って教役者間で共有することが出来ました。



聖職候補生 宮田裕三・
徳島伝道区勤務